

藤枝市史だより

第12号

平成17年3月15日発行
編集・発行 藤枝市郷土博物館
市史編さん係
〒426-0014 藤枝市若子7500 蓮華寺池公園内
TEL 0554(645)11000
E-mail fujieda-muse@ny.tokai.or.jp

修学旅行で

「建国ノ大義ヲ体感」

修学旅行は、明治十九年（一八八六）二月に、東京師範学校で実施された東京・銚子間二泊二日の長途遠足がその始まりとされ、その後、小学校などでも実施されるようになったといわれる。訓練的要素、校外学習的要素、親睦的要素をあわせもった日本独特の学校文化ともいえる。その目的地や旅行形態は、現

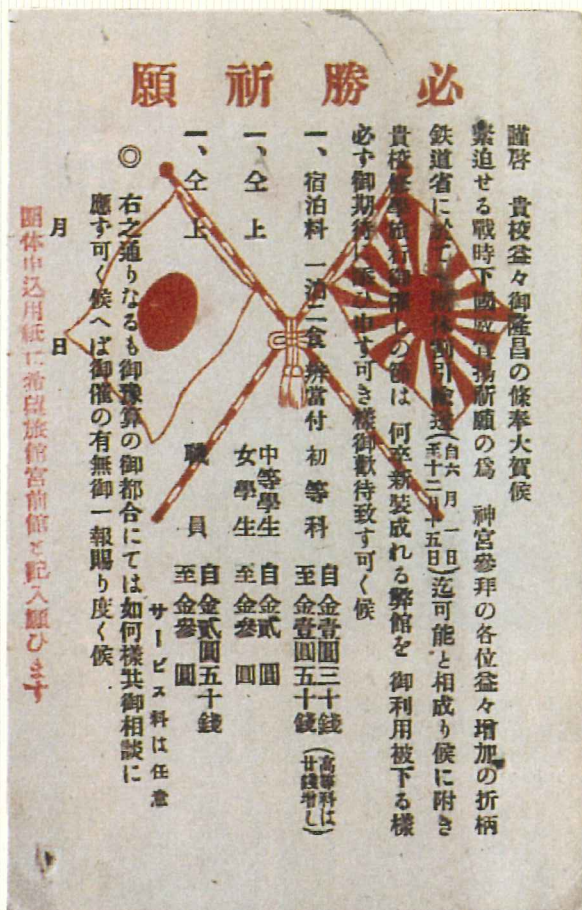
在でこそ極めて多様だが、戦前はひどく画一的であった。その原因のひとつが、満州事変からはじまる戦争の時代に、伊勢神宮参拝や皇居遙拝を通しての国民精神昂揚の手段として、修学旅行が大々的に利用されたという点である。

大洲小学校所蔵文書のなかに「指令綴」なる文書綴がある。学校外での教育活動（遠足など）の時の郡役所への承認申請文書の綴であり、大正十四年度から昭和十七年度にかけてのものが綴られている。文書を読み進めてみると、昭和戦前期にこの地域の小学校でどのような修学旅行が実施されていたのを知ることができる。

大洲尋常高等小学校の修学旅行（高等科2年）

大正13年度	1日	興津農事試験場・三保灯台・静岡
14年度	1日	韭山反射炉・三島大社・御用邸・千本浜
昭和1年度	1日	浜松市及びその周辺
2年度	1泊2日	浜松市内・井伊谷神社・弁天島
3年度	2泊3日	熱田神宮・伊勢神宮・名古屋市内
4年度	1泊2日	熱田神宮・伊勢神宮
5年度		(文書欠)
6年度	1泊2日	熱田神宮・名古屋市内・伊勢神宮
7年度	1泊2日	熱田神宮・名古屋市内・伊勢神宮
8年度	1泊2日	熱田神宮・名古屋市内・伊勢神宮
9年度	1泊2日	熱田神宮・名古屋市内・伊勢神宮
10年度	1泊2日	熱田神宮・名古屋市内・伊勢神宮
11年度	2泊3日	鳥羽・伊勢神宮・熱田神宮・名古屋市内
12年度	2泊3日	鳥羽・伊勢神宮・熱田神宮・名古屋市内
13年度	2泊3日	鳥羽・伊勢神宮・熱田神宮・名古屋市内
14年度	2泊3日	伊勢神宮・熱田神宮・名古屋市内
15年度		(文書欠)
16年度		(文書欠)
17年度	2泊3日	熱田神宮・伊勢神宮・名古屋市内

(大洲小学校所蔵「指令綴」より作成)



宇治山田駅前の旅館から学校へ送られた葉書

大正十四年から昭和十七年にかけての大洲小学校高等科における修学旅行は、表のように実施されたが、大きな変化は、昭和二年度の日帰り旅行から一泊二日旅行への変化と、昭和三年度の熱田神宮・伊勢神宮参拝旅行への変化といえる。特に、昭和四年は画期ともいえ、従来に比べて格段に詳細な実施計画書が作成されている。それによると、この年は、理由は記されていないが、静波尋常

高等小学校、相川尋常高等小学校、大洲尋常高等小学校の三校合同、しかも尋常科・高等科合同で旅行が実施され、二見浦の浜千代旅館と名古屋の扇屋旅館泊の日程で二七四名の生徒が参加している。目的地としては「名古屋及び宇治山田市」が選定され、その理由として、「伊勢大廟ヲ参拝セシメ国民的精神並ニ敬神崇祖ノ念ヲ涵養シ且ツ名古屋市其他沿道各地ノ史蹟産業等ノ状態ヲ見学セシメントス」とある。翌五年の修学旅行要項には、目的として「時代思想ニ鑑ミテ伊勢大廟ヲ参拝シ以テ敬神崇祖ノ念ヲ涵養スルト共ニ建国ノ大義ヲ体感セシメントス」と記され、以後、定型化する。

関東軍が柳条湖事件を起こすのが昭和六年。日本の戦争がはげしさを増すなかで、忠君愛国教育の総仕上げの場として、修学旅行が大々的に利用されていたことは、この「指令綴」を見ても明らかである。

(近現代担当専門委員・県立掛川工業高等学校教諭 北原 勤)

田中城について

考古担当調査委員
藤枝市教育委員会 生涯学習課 主査

椿原靖弘



藤枝の田中城は「丸い城」として知られていて、現在でも上空からは円形の遺構を見ることができます。田中城について科学的な調査や論考が活発になされるようになったのは昭和五十年代になってからで、市でも昭和五十四年から部分的な発掘調査を行ってきました。今回の市史では発掘資料の見直しも行っていますのでその一部を紹介してみましよう。

田中城の時期

田中城の絵図を見ると寛永期以前のものには本曲輪に建物がかかれています。一方、本曲輪と二の曲輪の一部を調査した時に様々なものが出土しました。この調査では中国から輸入された土器や、国内で焼かれた土器も出土しています。この中から時期がわかりやすい瀬戸産の陶器の破片数を数えて見たのが下の表です。これによれば、ピークは大窯(※)1と3期で特に2期が突出しています。大窯2期はおよそ一五三〇〜六〇年くらいにあたり、ちょうど今川氏の時代(特に義元の時期)になります。武田氏が駿河に侵入したのは大窯3期にあたり、この時期には武田氏が滅び、駿河は徳川家康の領国となりました。また、大窯4期は一五九〇年頃から江戸時代初頭になりますが、この頃の瀬戸産の陶器片はとも少なくはなっています。瀬戸産の陶器だけで判断することは危険ですが、田中城がいつ頃使われていたかを知ることができます。この他に本曲輪からは中国の景德鎮産の皿や白磁、一三〜一四世紀に作られた青磁の盤などが国内産の陶器とともに出土しています。明らかに当時は本曲輪が使われていたのです。

また、絵図を見ると田中城には六か所に三日月堀があります。三日月堀は、堀の内側に土塁と兵を置くための空間があ

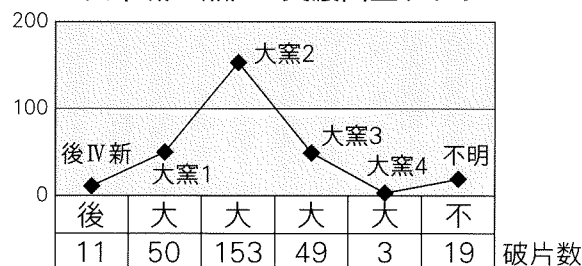
り、これらとともに「馬出し」という兵を溜めるための施設の一部で、武田流の築城法といわれています。そこで、田中城の馬出しも信玄時代に築られたといわれてきました。ところが、近年では曲輪をもった三日月堀は徳川家康の時期に造られたともいわれていて、単に三日月堀は武田信玄とは考えられず、解決には発掘調査を待つしかありません。今後の課題でしょう。

田中城をもっと知るには

考古学の研究に限らず田中城についての研究はあまりにも、円形の城の地域にのみこだわっていたのではないのでしょうか。これに囚われなければもっと色々なことがわかってくると思っています。例えば、今までに「藤枝は何の街？」と聞いた時に「東海道二十二番目の宿場町」と答えることはあっても、「田中城の城下町」と答えた方はいませんでした。江戸時代には丸い田中城の北西に藤枝宿があり、宿場の下伝馬町に田中城の大手口があつてこの大手の周辺に武家屋敷が広がり、城の反対側にも武家屋敷が広がっていて、ここは新宿と呼ばれていました。ところで、藤枝宿は宿場ですが田中城の城下町も兼ねていましたし、江戸時代の人は皆、そのことを理解していました。ですから、宿場の反対側に武家屋敷が創られた時に新宿(しんしゅく)と呼んだのでしょうか。このように見方を変えたり、広い目で田中城を見ていけばもっと田中城を理解できると思います。

※瀬戸地域では、一六世紀ころ陶器を大量生産するために数十メートルの大きな窯が作られました。

田中城 瀬戸・美濃出土グラフ



稲葉の里

調査協力員（稲葉地区）
番場英子



稲葉は、山あり、川あり、田畑がある気候温暖に恵まれた所です。昔のおもかげを残す蔵もあります。自然豊かな稲葉の里も、今は第二東名自動車道の建設等で変わってきました。昭和六十年、稲葉公民館開館時に地域の昔を調べる郷土史講座が発足しました（郷土史研究会）。今は亡き初代館長、大塚晃先生のご指導のもと、当時郷土史教育が叫ばれ、その地域に根ざした活動が実践され、前進して公民館活動の発表となりました。この研究部は当初参加者二十名、『稲葉村誌』、『藤枝市史』、『駿河国志』を資料として、自主研究、大先輩の方からのお話を聞いたり、口碑・伝説などの学習調査を行いました。

テーマは、稲葉の歴史、学校の移り変わり、静岡の方言、昔の風俗とくらし（年中行事）、神社、寺院について、災害、郷土の発展に尽くされた人物について、また市の著名な史跡・遺跡を学習し、実地見学など、冊子を作り公民館まつりに発表もしました。地区内では「いつ」、「どこで」、「何がおこったのか」知っている人も少なくなりました。村誌にも記されている伝説から「弘法測と桜川」について

これは、平安時代のことです。空海（弘法大師）は仏教の修行をつみ、当時日本の諸国を行脚して、仏の道を説き、諸国に多くの伝説・口碑を残しています。稲葉の里にも弘法測という地名があります。弘法大師が藤枝町原まで来て、飲み水を乞うた所で、里人が「この奥の里にとてもきれいな水が出る所があるから」と言われ、瀬戸川に沿って上の方へと、堀の内の庄ヶ原に来て、その清水を得て、のどの渇きをいやすことができました。大変喜んで、「今後この地にはどんな日照りが続くかが、水に困ることはないようにする」と言って、立ち去りました。不思議なことにその後、里人は水に困ることがなかった、といわれています。

何百年かの後、この話を代官が聞き、大師様の顕徳であるから像を刻んで祭るように言われ、当時の里人がここに祭りました。洪水などで最初に安置した場所とは違いますが、寺島の排水が瀬戸川に合流する所に深い淵が出来ており、寺島の岩間に現在祭られています。桜川という地名は、この川をとりまく近在の山桜が散って、花びらが川に流れ、美しい景観があったことにより桜川と名付けられました。今も大きな山桜が山のあちこちに昔のおもかげを残しています。ここを弘法測と伝えられている。古老より語り継がれて現在に至っております。

「助宗古窯跡」

瀬戸川中流域の助宗・花倉・寺島地区の山麓部に分布している。見学に行った時、土器（須恵器）を見つけた。茶畑の中から拾い集めたものです。皿？、高坏、わん？想像しながら、かけらをパズルにはめるように並べるのも楽しいものです。



助宗・細谷にて発見した土器（須恵器）

かわらばん

市史学習会を開催（平成十六年九月十八日）

講師に原秀三郎氏（市史編さん専門委員会顧問・静岡大学名誉教授）をお迎えし、伝承や記録・資料に現れる古代の藤枝についてお話ししていただきました。万葉集や東遊歌に現れる藤枝はどんな様子であったのかを神社に注目して検討しました。飽波神社（藤枝五丁目）には早瀬を取り仕切る神がまつられていること、また、川の流れを堤防で防いでいた場所に川関神社があることから飽波神社から広がる志太の浦を通って各地へ産物が運ばれていたのではないかという研究報告でした。

※市史学習会は年二回開催しています。ご家族・お友達をお誘い合わせの上、ご参加下さい。

発売中

『藤枝市史』

- 資料編2 古代・中世 …… 三、五〇〇円
- 資料編3 近世 …… 三、五〇〇円
- 別編 民俗 …… 四、〇〇〇円

『藤枝市史研究』

- 第1号・第2号 …… 八〇〇円
- 第3号・第5号 …… 一、〇〇〇円

『藤枝市史叢書』

- 2（広幡村誌） …… 八〇〇円
- 4（瀬戸谷村誌） …… 八〇〇円
- 5（青島村誌） …… 一、二〇〇円
- 6（葉梨村誌） …… 八〇〇円
- 7（西益津村誌） …… 一、〇〇〇円
- 8（岡村伝一郎少年の日記） …… 一、〇〇〇円

※1（稲葉村誌）、3（大洲村誌）は完売となりました。

販売に関するお問い合わせ先

藤枝市郷土博物館 電話054(645)1100

稲葉地区の史跡・口碑・伝説

稲葉公民館郷土史研究部

昭和六十一年十一月

稲葉公民館郷土史研究部『稲葉地区の史跡・口碑・伝説』（昭和61年11月作成）

国内最古級の 馬鋤が出土



考古担当調査委員
郷土博物館学芸員

岩木智絵



馬鋤出土状況

仮宿堤坪遺跡（藤枝市仮宿）では、国土交通省による国道1号藤枝・岡部IC関連事業（第二東名と国道1号藤枝バイパスを結ぶ道路建設）に伴い発掘調査が行われました。遺跡は藤枝駅から北東に約九き、市指定史跡「朝日山城跡」が所在する朝日山（標高約一一〇メートル）の東裾で標高約二〇〇〜二五メートルに位置しています。現在の朝日山城跡への登り口付近にあたり、南北約一五〇メートル東西約四〇メートルの範囲に遺跡が広がっています。周辺の地形は朝日山山塊から派生して伸びる丘陵とその間を流れる小さい谷が交互に入り組んだ複雑な地形になっています。遺跡は朝日山城に関連した内容が予想されていましたが、発掘調査を行ったところ、平安時代末〜鎌倉時代にかけての掘立柱建物や緩い傾斜をもった棚田状の水田跡がみつかり、さらに掘り下げていくと古墳時代前期後半の竪穴式住居や河川跡が発掘されました。このほか縄文時代から戦国時代、近世にまでわたる遺物が採集されており、非常に年代幅の大きい遺跡であることがわかりました。

平成十五年度に発掘調査を行った仮宿堤坪B地区では、古墳時代前期後半（四世紀後半）の河川跡から木製の大型農耕具である「馬鋤」が出土しました。馬鋤は、背後の山地から流れ出た谷川に堆積した包含層（遺物を含む土）から古墳時代前期後半の土師器、木製農耕具（一本鋤）、建築材などとともに出土しています。谷川の周辺には四〜五軒の竪穴式住居があり小規模な集落があったことがわかっています。

出土した馬鋤は、大きな櫛のような形をした農耕具で、約六センチ角、現存する長さ一〇五センチ（推定復元一三五センチ）の「台木」に木製の歯を取り付けています。歯は長さ約三五センチで先端が鋭く削りだされており、六本が台木に取り付けられた状態で出土しまし

たが復元すると一一本の歯が付いていたとみられます。台木の両端には穴があいており、前方に向けて柄が取り付けられていた痕跡が残っていました。使用されている木材の樹種は、台木はアカガシ、歯は九本のうち七本はアカガシでしたが、クリとイヌマキが一本ずつ使われており樹種の異なる二本の歯はあとから差し替えられたものと考えられます。このことから馬鋤は補修をしながら長期間農作業に使用されたとみられます。

馬鋤は鋤で田畑の土越しをしたあとに土の塊を細かく砕くための道具で、日本では中世に広く普及した農耕具とされています。しかし、発掘調査で見つかった資料によって次第にその出現する年代が古いくことがわかってきており古墳時代中期までさかのぼることが確実になっていました。近年、さらに古墳時代前期後半までさかのぼる例が報告されるようになっていますが、これまでにわかっているのは滋賀県能登川町の石田遺跡、大阪府八尾市の木の本遺跡の出土例です。今回の仮宿堤坪遺跡での出土は古墳時代前期後半の馬鋤として国内では三例目という最古級の資料であり、馬鋤の年代がここまでさかのぼることをさらに有力に裏付けるとともに、当時の先進地である近畿地方のみでなく東海地方まで分布が広がっていたことが判明したという意味で貴重な発見であるといえます。また、馬鋤の字にあらわすとおり人力で使用することは困難であると考えられる大型の農具であり、馬や牛などの家畜を利用した農耕を行っていた可能性を含んでいます。馬鋤の出現する年代だけでなく、牛馬耕（家畜の力を利用した農業）が始まる年代がいつか？牛や馬が大陸から日本へ渡って来る年代がいつか？など考古学上たいへん興味深い大きな問題を投げかけています。